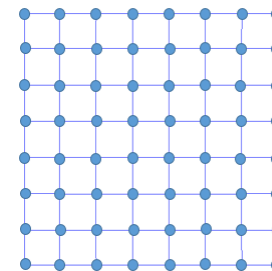


数値流体計算の基礎：簡単なイメージ

1. 空間をメッシュ化する

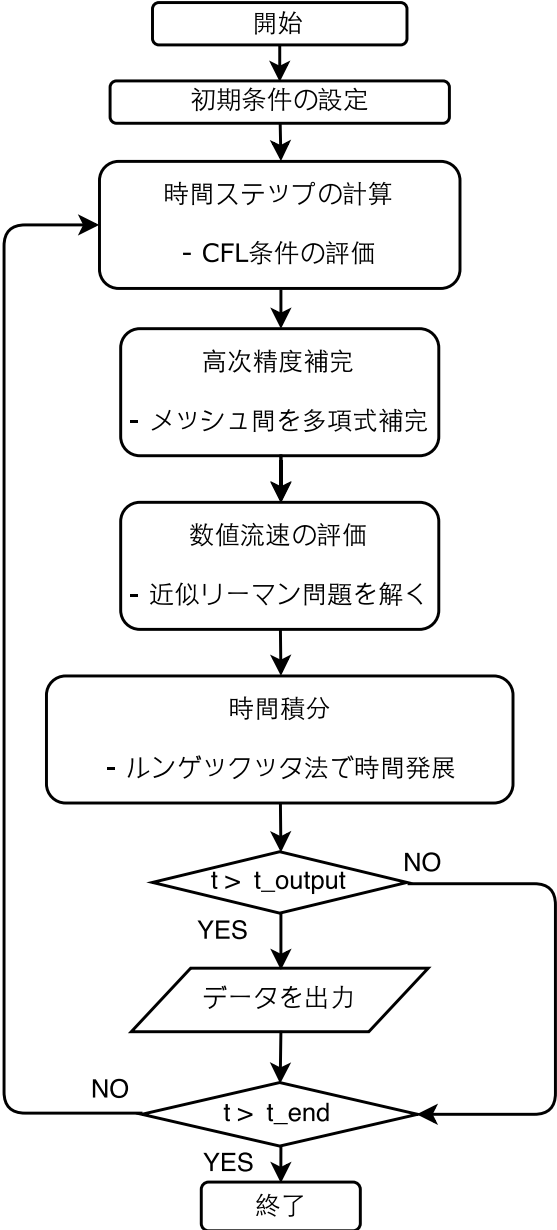
2. 流体の方程式(偏微分方程式)を指定し、
初期条件、境界条件を与えて数値的に解く。



基本的にはこれだけ。何が難しく、あるいは複雑にさせているのか？

- 1) スパコンを使っても、メッシュ数をものすごく大きくはとれない。メッシュ数を増やさなくても、精度がよくなる方法が必要。
- 2) 計算の時間ステップを大きくとれない。一つのメッシュを音速が伝わる時間が最大(クーラン条件)の時間幅となる。
- 3) 理学の場合、スピードよりも、正しさが求められる。

数値流体計算の基礎：簡単な流れ



← 空間をメッシュ化する

← 時間ステップ < $\text{メッシュサイズ} \div \text{典型的な速度}$ クーラン条件

← メッシュを”滑らかに”して、境界の値を計算

← 境界での不連続な値の時間発展を近似的に解く

← 時間発展を計算(e.g., ルンゲクッタ法)

← データを保存する or スキップする 3つ含めて“近似リーマン解法”

← 指定した時間まで計算が終わったら終了する。

空間高精度化

リーマン問題

時間高精度化

数値流体計算の基礎：クーラン条件

空間メッシュサイズ ΔL を 典型的な流体の速度 u で割った時間 $\Delta L / u$ が、大きくできる時間ステップの最大値。それより時間幅が大きいと、情報がセルを飛び越えてしまう。

時間刻みの指標として、クーラン数を、と定義する。

$$C = \frac{u\Delta t}{\Delta L}$$



通常、クーラン数は、1 よりも小さい数に設定する。

クーラン数が1のとき → 流れは要素1個分移動する



音速、流速が早い場合は、時間刻みが小さくなり、シミュレーションをゆっくりとしか進められない。

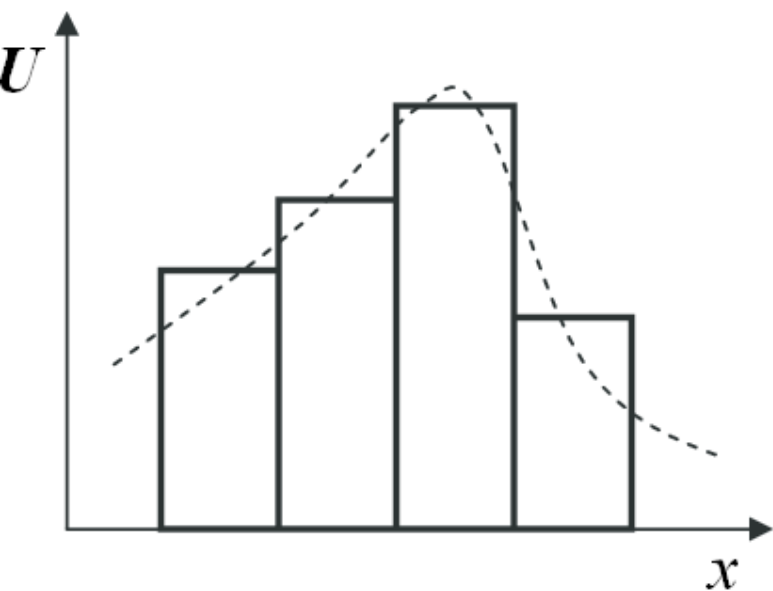
クーラン数が10のとき → 流れは要素10個分移動する



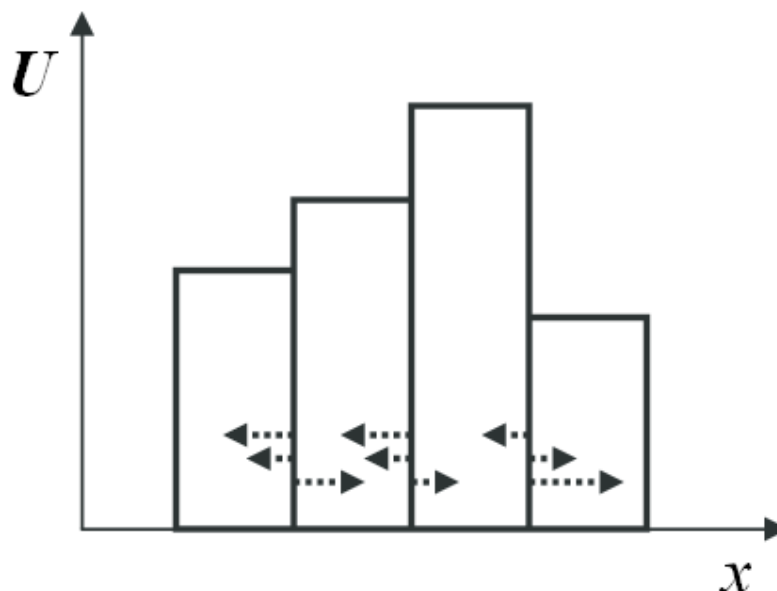
情報がセルを超えて伝わってしまう。

数値流体計算の基礎：近似リーマン解法

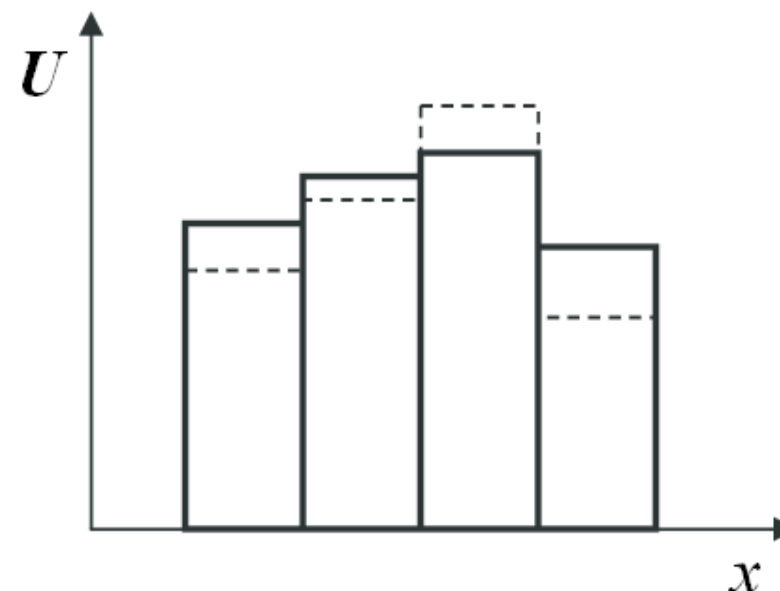
Step 1.



Step 2.



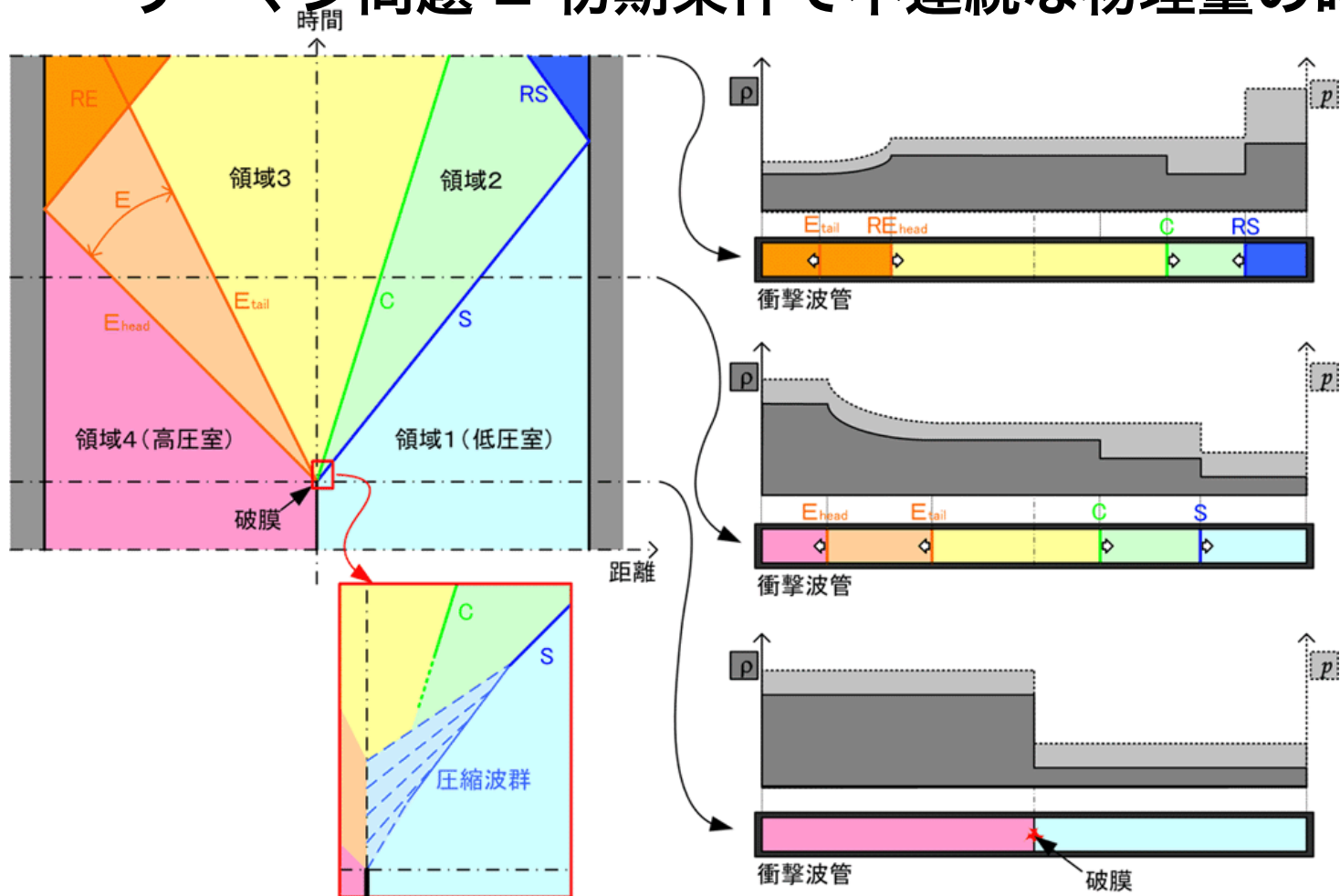
Step 3.



- Step 1. 物理量を区分的定数関数で近似する。
Step 2. 各セル境界でリーマン問題を近似的に解く。
Step 3. 各セル内でリーマン問題の解を積分する。

数値流体計算の基礎：リーマン問題

リーマン問題 = 初期条件で不連続な物理量の時間発展をどう解くか？



衝撃波管問題

- シンプルなリーマン問題の例

数値シミュレーションは、物理量を離散化して解くこと。

すなわち、時々刻々とセル境界で発生するリーマン問題をどう解くか、という問題でもある。

数値流体計算の基礎：時間高次精度化

ルンゲクッタ法などで、時間発展を解く。

2.1.7 TIME STEPPING

PLUTO has several time-marching algorithms which can be used in either a spatially split or unsplit fashion. If $\Delta t^n = t^{n+1} - t^n$ is the time increment between two consecutive steps and $\mathcal{L}$ denotes the discretized spatial operator on the right hand side of Eq. (1.1), the possible options are:

- *EULER*: 1st (explicit) Euler algorithm is used to evolve from U^n to U^{n+1} :

$$U^{n+1} = U^n + \Delta t^n \mathcal{L}^n$$

- *RK2, RK3*: 2nd or 3rd-order TVD Runge Kutta is used to advance the solution to the next time level:

RK2	RK3	
$U^* = U^n + \Delta t^n \mathcal{L}^n$	$U^* = U^n + \Delta t^n \mathcal{L}^n$	
–	$U^{**} = \frac{1}{4} \left(3U^n + U^* + \Delta t^n \mathcal{L}^* \right)$	(2.1)
$U^{n+1} = \frac{1}{2} \left(U^n + U^* + \Delta t^n \mathcal{L}^* \right)$	$U^{n+1} = \frac{1}{3} \left(U^n + 2U^{**} + 2\Delta t^n \mathcal{L}^{**} \right)$	

When `DIMENSIONAL_SPLITTING = YES`, the operator $\mathcal{L}$ in Eq. (2.1) is one-dimensional. Setting `DIMENSIONAL_SPLITTING` to `NO` makes the scheme dimensionally unsplit and the right hand side include contributions from all directions simultaneously. Unsplit implementation of the Runge-Kutta algorithms usually requires a more restrictive CFL condition, see Table 2.1.

pluto : 使用方法 -- 最も簡単な例

```
cd Test_Problems/HD/Sod
cd testrun
cp ../init.c .
cp ../pluto_01.ini pluto.ini
cp ../definitions_01.h definitions.h
python $PLUTO_DIR/setup.py → コンパイラを選択して抜けると、makefile が生成される。
make
./pluto
```

最低限に必要な3つのファイル

pluto.ini : 起動時に読み込む初期設定ファイル

definitions.h : コンパイル時に読み込む初期設定

init.c : 初期条件、境界条件が書かれたソースコード

その他に必要なファイルは、\$PLUTO/Src 以下から呼ばれる。

pluto : 使用方法 – init.c

初期条件を設定する。

```
void Init (double *v, double x1, double x2, double x3)
```

”セルの数”だけ呼び出される。

x1, x2, x3 がシミュレーション空間の離散化された座標

v はあるセルの物理量の配列。e.g., v[RHO] = 密度、v[PRS] = 圧力

境界条件を設定する。

```
void UserDefBoundary (const Data *d, RBox *box, int side, Grid *grid)
```

”境界の数”だけ呼び出される。

Data d = 全セル情報を保有する構造体。e.g.,

d->Vc[RHO][k][j][i] = (k, j, i)番目 のセルの密度

d->Vc[VX1][k][j][i] = (k, j, i)番目 のセルの 1 次元目の速度

d->Vc[VX2][k][j][i] = (k, j, i)番目 のセルの 2 次元目の速度

Rbox box = 境界のセルの配列。

int side = どの境界面かを示す整数。場合わけを簡単にするためのもの。

Grid *grid = シミュレーションの座標情報 e.g.,

x1all = grid[IDIR].x; 一次元目の座標の配列を取得する

pluto : 使用方法 – definition.h

コンパイル時に用いられる初期設定。

#define PHYSICS	HD	HD = 磁場を含まない流体計算
#define DIMENSIONS	1	シミュレーションの次元
...		
#define ROTATING_FRAME	NO	座標系の回転あり、なし。

注) このあとに、python \$PLUTO/setup.py でインタラクティブに変更した場合は、この definition.h も変更される。

pluto : 使用方法 – pluto.ini

実行時に読まれる初期設定。

[Grid]

	空間の 分割数 (未使用)	下限値	次元数	一様 grid (Uniform)	上限値
X1-grid	1	0.0	400	u	1.0
X2-grid	1	.0	1	u	1.0
X3-grid	1	0.0	1	u	1.0

この場合、一次元のシミュレーションで x 軸方向を 0-1.0 まで 400 分割する。

[Static Grid Output]

output_dir run1 ← 任意。とすると、run の結果が run1 というディレクトリに丸ごと入るので debug しやすい。ただし、実行前に run1 ディレクトリを作成しておく。

pluto : 使用方法 - コードの変更する場合

作業ディレクトリの直下に、\$PLUTO/Src 以下のファイルをコピーする。

そのファイルが本当に使われているのかを確認する。
QUIT_PLUTO(1);
を挿入して、そこで強制終了することをチェック。

pluto : 使用方法 - pyPLUTO

インストール方法

```
cd $PLUTO_DIR/Tools/pyPLUTO
python setup.py install
```

```
[syamada] $ ipython
```

```
In [1]: import pyPLUTO as pp
```

In [2]: data1 = pp.pload(1) ← 一つのファイルごとに、一つの data オブジェクトを生成する。

Reading Data file : /Users/syamada/work/software/pluto/PLUTO/Test_Problems/HD/Sod/testrun/data.0001.dbl

In [3]: data1. ← タブを押すと、保存されているメンバー変数、配列がわかる。

data1.DataScan	data1.SimTime	data1.level	data1.wdir
data1.DataScanHDF5	data1.Slice	data1.n1	data1.x1
data1.DataScanVTK	data1.datatype	data1.n1_tot	data1.x1r
data1.Dt	data1.dx1	data1.n2	data1.x1range
data1.NStep	data1.dx2	data1.n2_tot	data1.x2
data1.NStepStr	data1.dx3	data1.n3	data1.x2r
data1.ReadDataFile	data1.endianess	data1.n3_tot	data1.x2range
data1.ReadGridFile	data1.filetype	data1.nshp	data1.x3
data1.ReadMultipleFiles	data1.geometry	data1.prs	data1.x3r
data1.ReadSingleFile	data1.irange	data1.rho	data1.x3range
data1.ReadTimeInfo	data1.jrange	data1.vars	
data1.ReadVarFile	data1.krange	data1.vx1	

data1.rho

Out[3]:

[illegible]

• • •

と表示される。あとは、`matplotlib` などでプロットする。